日本におけるメーザー研究

坂井　榮八郎

Studies on Möser in Japan

This is a draft of the speech that the author made at "Friedenssaal" (Hall of Peace) in the old city hall of Osnabrück on December 8, 2002, commemorating the birth of Justus Möser (1720–1794). The speech elaborates on the footsteps of studies on Möser in Japan, encompassing three different periods.

Since the pre-World War II era, Japanese historians, economic historians in particular, had manifested avid interest in Möser, under the great influence of German historiography. The foremost influences at that time were W. Roscher and A. Dopsch. However, since the mid 1950's, Japanese historians rapidly lost interest. This process was just in parallel with the penetration of Marxism-Leninism. Then, after the mid 1980's, academic interests in Möser re-emerged, while the dominance of Leninism lessened.

The author gives an introduction to the movement of studies on Möser in Japan with some examples, and concludes that his interest in Möser is nothing but his interest in 18th century itself.

ユストゥス・メーザー誕生日記念講演、二〇〇二年十二月八日、
於、オスナブリュック市旧市庁舎「平和の間」（原文ドイツ語）。

ご臨席のオスナブリュック市長様、敬愛するメーザー協会の皆様、ご列席の皆々様。

オスナブリュックの歴史的市庁舎「平和の間」――それは私にとりまして、これまでは所詮、観光的見学の対象でしかありませんでした。そこにいま私が記念講演の講演者として立っている――こんなことはおよそ私が想像できる世界の外のことでありました！　それだけにまた大きな喜びをもって、そして少しばかり緊張した栄誉感につつまれて、私は今日、皆様に日本の一メーザー研究者としてご挨拶申し上げます。もう長い間、といってもほんの少しずつですがユストゥス・メーザーの作品を勉強し、いまようやくにしてメーザーの『アルミニウス』と『オスナブリュック史』への「序文」、そして『ドイツの言語と文学について』を日本語に翻訳するという宿願に取り掛かっている日本の研究者であります。そして私は今日皆様方に、東京のある小さな研究会の名においても合わせご挨拶させていただきます。四年前から、そう頻繁にではありませんが、ともあれ定期的に会合し、一緒に『愛国の幻想』を読んでいる研究会です。この「メーザー研究会」――私たちはそう呼んでおりまして、私もその一員なのですけれども――この研究会もまた『幻想』を抜粋して翻訳・出版することを考えております。私の翻訳と合わせ、この共同作業もまた、日本のより広い読者層にユストゥス・メーザーの世界を紹介し、関心をもつサークルを広げることに寄与するところがありましょう。それが私たちの願いであります。と申しますのも、日本においてメーザーは歴史家やドイツ文学者

の一部にこそ知られておりますが、一般的にはあまり知られておらず、読まれることは更に少ないからです。これはすでにドイツにもある程度言えることですけれども、日本についてはなおさらであります。メーザーになんらか積極的な関心をもち、あるいは少なくとも副次的な関心でメーザーと関わっている歴史家やドイツ文学者の数は、恐らく十人を大きく上回ることはないでしょう。私はそう推量しております。

しかしこの状況は、かつて日本人がメーザーに対して示したかなり活発な関心と比べ、いささか奇妙なコントラストをなしております。私の同胞の歴史研究者である阿部謹也氏が一九七二年の『オスナブリュック研究年報』への寄稿「日本の歴史学におけるユストゥス・メーザー」で紹介しておりますように[1]、日本の研究者はすでに戦前から戦争中、そして戦後も五十年代まではメーザーにかなり活発な関心を示していたのです。メーザーへのこの関心がその後どのようにして薄れていったか、そしてある種の休止期間をおいて今日またどういう風に蘇ってきたか、それをお話しするのが私の今日の講演の主たる内容をなすことになります。しかしそのためにはまず、ごく簡単な回顧が必要でしょう。阿部氏の報告に添いながら、若干の補足も加えてお話しさせていただきます。

さて阿部氏は、私たち日本人がどういうルートでメーザーを識ることになったかについて、おおよそ二つの状況を指摘されました。その一つは、日本の近代の歴史学がドイツのランケ的歴史学の強い影響の下で発展したという一般的状況です。日本によるドイツ歴史主義の受容と言ってもよろしいでしょう。この精神史的潮流は一九三六年以来の日独同盟によって促進されたところがありますが、しかし戦後にもなおその影響を残したのです。この関係で象徴的なのは、フリードリヒ・マイネッケの最後の大著『歴史主義の成立』（一九三六年刊）が、まだ第二次大戦中の一九四三年に日本語に訳され、戦後もなおかなり広く読まれたことであります。このマイネッケの『歴史主義』では、ご承知のように歴史主義の源流としてメーザーには特別な一章が設けられておりますが、すでにこの一書だけによっても

メーザーの名は、日本において限られた専門の世界を越えて知られるようになったのであります。

そして第二に阿部氏は、いま述べた一般的状況の他に、特に経済史の研究者たちがメーザーに特別の関心を示したということを正しく指摘しておられます。その際二人のドイツないしオーストリアの経済史家が日本の研究者に大いに刺激を与えたと言えましょう。その一人はヴィルヘルム・ロッシャーでありまして、彼はその『ドイツにおける国民経済学の歴史』でメーザーの政治観と社会経済観を大変バランスよく紹介しておりますが、そこで彼はメーザーを「十八世紀ドイツの最大の国民経済学者」と呼んだのでありました。(2)

もう一人はアルフォンス・ドープシュです。彼のヨーロッパ文化発展の連続説は日本におきましても大きな関心を呼びまして、彼の主著の一つ、『ヨーロッパ文化発展の経済的・社会的基礎』が日本語に翻訳され、千ページを越える分厚い本になって出版されたほどであります。もっともこの翻訳が出たのは大分あと、一九八〇年のことですけれども。(3) しかし私たちの関連で重要なのは、ドイツのマルク共同体についてのドープシュの批判的論評が日本の歴史家や法学者の注意を惹いたことです。

その好例として私はここで、戒能通孝という法社会学者の一九四三年の著書『入会の研究』をあげたいと思います。(4) 「入会」というのは共有地の利用、あるいはそのための共同体で、ドイツのマルク共同体と十分に比較可能なものです。入会地は多くの場合、山林や草刈場でありますが、これはかつて日本の農業生活において、ドイツと同じように大きな役割を果たしました。しかしそれらは十九世紀以来の近代化過程においてまずは官有地と民有地に区分され、なお民有地としては多くの場合、もと庄屋など大農の所有に帰しました。しかしそこからしてまた多くの係争が生じたのであります。さて今名をあげた著書で、著者戒能氏は、入会理論に関わる冒頭の序説におきまして、まず最初にマルクについてのメーザーの所論を取り上げております。メーザーから始めてドイツのマルク共同体論を論評するの

ですが、その際著者は大幅にドープシュに依拠しながら論を進めています。[5] メーザーに関して言えば、戒能氏はメーザーにおける共同体的自治の理念、また地方的慣習法の擁護に共感を寄せていますが、その改革活動の限界性をもはっきりと指摘しております。この際私は皆様方に、この著者が現実の問題にも立ち向かう法学者であり、後年、入会利用権をめぐる大きな法的係争事件（小繋事件）におきまして、戦う小農民の弁護士として非常に有名になる人であることを指摘しておきたいと思います。メーザーについては別著『ユストゥス・メーザー』で詳論する予定という、『入会の研究』で表明された著者の計画は残念ながら実現されませんでした。

さてメーザーは戦後日本における相続法の改革に際しても引き合いに出された――私がそう申し上げたら、これも皆様の興味を惹くのではないでしょうか。この戦後の改革まで、日本において相続は基本的に男子の長子相続によっておりました。家屋敷をはじめとする家族の財産は家督相続者たる長男によって相続され、他の兄弟姉妹はなんらかの形で家を出て行かなければなりませんでした。しかしこの相続関係は戦後の日本で民主化され、すべての兄弟姉妹に平等な権利が認められることになりました。ところでこの改革は他国の事情との比較研究を促し、この関係でルヨ・ブレンターノの論文「プロシャ最近の農業改革の父ユストゥス・メーザー」が彼の他の相続法関係の論文とともに日本語に訳されたのであります。[6] もっともこの翻訳はメーザーにとって、あまり名誉なことにはなりませんでした。というのはブレンターノは彼流の民主的平等主義の観点からメーザーによる一子相続の擁護を大変辛辣に批判しましたし、その上、ここで問題にされている、十九世紀後半の一子相続を基本とするプロイセンの農業諸法は、日本の翻訳者によって、一九三三年のナチスの世襲農場法への一階梯と解釈されたからであります。

メーザーへの少々特殊な関心のもう一つの例として、南亮三郎という人口学者の人口理論的な仕事を紹介したいと思います。日本における人口学のパイオニアで、トーマス・ロバート・マルサスの研究者でありますが、この人はメ

ーザーを以てマルサスの最も重要な先駆者とみているのです。[7] 南によれば人口学へのメーザーの大きな寄与は、メーザーが人口の増加をはじめて社会階層に関連づけ、いうなれば階級問題として取り上げたこと、またこの問題をアダム・スミスにも先立って労働賃金の問題と関連づけたことにあります。その際南はロッシャーの他に、ルートヴィヒ・ルプレヒトの『ユストゥス・メーザーの社会・国民経済観』に依拠しております。しかしまた私は、彼がメーザーの著作のいくつか、『幻想』の論説や『オスナブリュック史』を、少なくとも部分的には自分で、しかもかなり注意深く読んでいることにも気づきました。[8]

さて、このような例を私はこれ以上積み重ねようとは思いません。しかしいずれにせよ私は阿部氏とともに、メーザーへの関心はさまざまな分野で、少なくとも五十年代まではなおかなり旺盛な状態にあったと確認することができます。阿部氏の報告で言及されている出口、小林両氏の論文は、今日でもなお日本のメーザー研究への貴重な寄与と言えますが、それが出たのが一九四七年と一九五五年であります。[9] しかしその後関心は目に見えて薄れてしまいます。専門的な文献や辞典類において、彼の名前はいろいろな関連でしばしば挙げられはします。しかし独自の研究対象としては、彼はもはやまともに問題にされなくなってしまいます。そのように思われました。そして、もし私がその理由を問われるならば、私は何よりも、戦後の日本を特徴づけるところの、マルクス主義の大きな影響力を指摘したいと思います。正確にいえばマルクス-レーニン主義の影響です。歴史学もまた、当時支配的になったこの新しい政治的・イデオロギー的思潮に呪縛されることになりました。

私が一九五四年に大学で歴史の勉強を始めたとき、日本の歴史学界はすでに大幅にマルクス主義的に色づけられておりました。どうしてそうなったか、その背景にまでここで踏み込むことはできません。いずれにせよ、伝統的な政治史や理念史に代わって社会経済史、特に農業史の研究が主流となりました。そしてほとんどの分野でも、農業資

本主義発展についてのレーニンのいわゆる「プロシャ型の道」と「アメリカ型の道」のテーゼが道標的な役割を果たすことになったのです。

レーニンによれば、第一の「プロシャ型」の場合には、封建的な農場領主経営が徐々にブルジョア的ユンカー経営に転化します。他方第二の「アメリカ型」の場合には農民が農業経営の主力となるのですが、これはアメリカのようにそもそも領主経営が存在しないか、あるいはフランスにおけるように革命によって粉砕された国に見られることとされています。[10] このレーニンのテーゼは日本において、多くのマルクス主義の歴史家によってかなりドグマ的に受容されました。ヨーロッパ史、特にドイツ史の研究はまずはこれによって方向づけられることになったのです。人びと、特に若い歴史家は、プロイセン-ドイツの歴史の中に、西欧との比較において「遅れている」要素を見つけ出そうとし、またドイツの農業改革、いわゆる農民解放の不十分さを、フランス革命の成果と比較して明らかにするように努めました。それによって「プロシャ型」の近代化の矛盾した性格――それがとどのつまりはナチスの暴力支配に行き着くことになるのですけれども――、この矛盾した性格を解明しようとしたのです。その際人びとは、実は「プロシャ型の道」の背後に「日本型の道」を見ておりました。これもまた同じく「上から」の近代化過程でありまして、いまや別して否定されなければならないものだったのです。さてこういう状況で、誰がいったいあの保守-反動的ユストゥス・メーザーなどに関わり合おうとするでしょうか。なにしろこの男はフランス革命を否定しようとさえしたのですから。メーザーの後世への影響などについても、これを真面目に顧慮しようとする人はきわめて少数でありました。

このごく少数の人の一人として、経済学説史家で、ドイツの専門家の世界にも知られたフリードリヒ・リスト研究者である小林昇氏がいます。私はここで小林氏の壮大なリスト研究をどのみち不十分に要約することはいたしません。

ただ彼のリスト研究は一部きわめて精密なメーザー研究を含んでいるということを指摘しておきたいと思います。[11] リストは若い頃から熱心にメーザーを読みました。そしてリストが読んだものを、小林氏は丹念に跡付けて読んだのです。私は彼が、メーザーの『オスナブリュック史序説』を本当に通読したごくごく少数の日本人の一人だろうと思っています。[12] 小林氏がメーザーを重視するのは、彼の見るところ、ドイツの国民経済学はリストを通じてはじめてメーザー以来のドイツ歴史主義の伝統としっかりと結び付けられたからであります。リストの国家観・経済観に対するメーザーの影響は小林氏によって非常に精密に跡付けられています。とりわけリストの論文『土地制度論』に関してそうでありまして、それというのも小林氏はこの論文に、リストの全経済学体系の根底をなすものとしての重要性を認めているからなのです。[13] しかし小林氏のこの精密なメーザー研究は、その後日本において、彼の弟子たちによっても、さらに生産的に推し進められるということはありませんでした。[14]

七十年代になると、日本におけるメーザー研究は一種の停滞状態に入ったように見えます。阿部勤也氏はその後ドイツとヨーロッパの中世社会史家として多くの業績をあげ、間もなく日本の最も高名な歴史家の一人になったのですが、彼も一九七二年の『オスナブリュック研究年報』への寄稿後は、メーザーについて特に何かを書くことはもはやありませんでした。この時期で唯一注目すべきことは、メーザーの『オスナブリュック史』への「序文」が澤田昭夫氏によって一部省略された形ではありますがともかく翻訳され、同氏と私の恩師である林健太郎氏の編になる世界史のテキスト・ハンドブックに収められたことであります。[15] これはそれ自体立派な業績ですけれども、それにふさわしい評価は得られなかったように思われます。

なお日本のドイツ文学研究、特にゲーテ研究はすでに長い伝統をもっておりますが、このドイツ文学研究者の間でも、メーザーへの関心はそれほど活発ではなかったように見えます。戦後一九五七年以降の日本の『ゲーテ年鑑』全

巻を通じて、私はメーザー関係の論文はたった一つ見つけただけでした。すなわち小島康夫「ユストゥス・メーザーの道化擁護論」でありまして、一九九七年、つまりつい五年前の論文です。[16] この論文において著者小島氏は、滑稽なものを人間的なものと認識し、自分自身のこととして受け入れようとするメーザーの努力を、その時代の中に位置づけて評価しようと努めています。著者はドイツ喜劇の研究者でありまして、なお私の問い合わせに対し、他になんらかメーザー研究に携わっている人を自分は知らないと知らせてくれました。また私は本年七月に日本のゲーテ協会総会で「ゲーテとメーザー」という講演をしましたが、その折私は聴衆の方々にどんなものであれメーザーについて書かれたものがあったら教えてほしいとお願いいたしました。そうしましたら後で「オスナブリュックのメーザーとワイマルのゲーテ」という、若いゲーテ研究者の論文一篇を得ることができました。[17] こういう次第で、日本におけるメーザー研究が今日なお残念ながら個々に分散して、組織化されないまま行なわれていることがお分かりになるかと思います。

歴史学の領域におきましても、専門的文献にメーザーの名が再び現れてくるようになったのは、ようやく八十年代になってからのことでありました。最初はポツリポツリと、それから徐々に頻繁に――しかもこれがまずは経済史学者の仕事に現れてきます。レーニン主義のドグマに対して自ら距離をとるようになった経済史学者たちの仕事です。

ここで私はまず第一に、藤田幸一郎氏の業績をあげたいと思います。ミュンスターのティリー教授のところで勉強した人ですが、彼はいわゆる農民層分解についてのレーニンのテーゼを疑問に付しました。このテーゼによれば、農業社会を構成していた小農民たちは、資本主義的市場経済の発達につれて、一方では農業企業家、他方では労働者という二つの極に分解してゆきます。[18] そして近代のプロレタリアートの起源もここに求められることになるのですが、藤田氏はここにある種の理論的構成を感じ取ります。そしてドイツの農村下層民の実際の生活状況を追究して自ら社

会史的研究に従事するのですが、彼はこれを、東プロイセン、ヴェストファーレン、特にミンデン＝ラーフェンスベルク、そして南ドイツのバーデンという三地方の各地について行いまして、その成果が一九八一年の彼のドクター論文になり、一九八四年に公刊されます。[19] そして彼は一九九四年に『手工業者の名誉と遍歴職人』というもう一冊の本を書きまして、職人組合の生活世界を再び大変詳細に分析いたします。[20] そして全体として藤田氏が到達した結論は、十八世紀と十九世紀初頭の農村および都市下層民の生活と生活感情はなおかなり強く身分制的＝伝統的な要素に規定され続けていたということでありました。その際彼は当然のことながらユストゥス・メーザーの世界にも触れるところがありました。特にその二番目の本で、藤田氏はメーザーの「賤民」観を詳しく紹介し、それを批判的に論評しています。ついでながら、この藤田氏は、オスナブリュックの国立公文書館の所蔵史料を研究のために積極的に利用した最初の日本人だろうということを付け加えておきましょう。この史料研究に基づいて彼は、十八世紀後半以降のオスナブリュックにおける手工業者の生活世界を大変具体的に描き出したのです。ただ残念なことに、すべて日本語ですけれども。

私としましてはただ、当地の文書館で研究を精力的に押し進めている二番目の日本人が、その成果を近い将来に、日本人以外の人にも読める形で公表することを願うのみであります。本日、この場にいらっしゃる平井進さんのことです。平井さんは藤田氏の下層民研究を批判的に摂取し、オスナブリュックの農村における社会秩序と社会的規律についての研究で博士号を取られました。最近の論文の一つで平井さんは、貧民の規制と定住管理についての一七六六年と一七七四年のメーザーの立法を詳細に扱っています――いまのところまだ日本語でですけれども。[21]

少し違った道を通って肥前栄一氏はメーザーに行き着きました。農業経済史家で、特にアウグスト・フライヘル・フォン・ハクストハウゼン――十九世紀の農政家で、女流詩人ドロステ＝フュルスホフの伯父さんですけれども、こ

のハクストハウゼンの研究者としてドイツでも知られた人です。日本の大抵の経済史研究者がレーニンの「プロシャ型」と「アメリカ型」のテーゼに呪縛されて、ドイツの経済発展をまず第一に西欧の発展との比較で捉えようとしたのに対し、肥前氏はドイツとロシアの農業発展の比較研究に向かいます。そしてドイツ、とりわけヴェストファーレンのフーフェ制度とロシアのミール共同体の比較研究――これには人口・定住史研究も含まれているのですけれども――こういう研究を通じて肥前氏は次のような結論に達します。すなわち、社会的発展の決定的な分岐線はドイツと西ヨーロッパの間にではなく、ドイツとロシアの間、それもほぼフーフェ制度の東の境界に添って引かれるべきだという結論です。[22] そしてこういう研究を通じて、彼はユストゥス・メーザーの世界にも触れることになりました。一つにはヴェストファーレンの農業制度の研究を通じて、しかしとりわけハクストハウゼンの著作の研究を通じて。と言いますのも、ロシアの農業生活に関するハクストハウゼンの視察報告は、今日でもロシア研究の大変重要な資料となっているからです。肥前氏のハクストハウゼン研究は徹底したもので、彼はついにはハクストハウゼン家の家族文書保管所でハクストハウゼンの処女作『ベッケンドルフとベッカーホフ（Böckendorf und Böckerhoff）』の手稿本を発見し、それにコメントをつけて『ヴェストファーレン年誌』で公表する、といったこともしたのでした。[23] さてこの肥前氏がどうしてメーザーにも関心をもたないことがありましょうか。何しろハクストハウゼンという人は、ご承知のように、その考え方の似ているところから「第二のメーザー」と呼ばれた人なのですから。

ところでこの肥前氏は何年も前から、何人かの若い農業史の研究者たち、その多くは彼の以前の弟子たちなのですが、若い人たちとドイツ農業史の史料の研究会をされていました。そして私が一度そこに出させていただいたことが一つのきっかけになって、この研究会が少し拡大・改組され、「メーザー研究会」になったのです。これには藤田氏も参加されています。最近の会合はほんの先日、八日前に行われました。私たちは藤田氏の翻訳を基にして、分割さ

れた共有地に対する課税の可否をめぐるメーザーの論説について議論いたしました。[24]

さて最後になりますが、ここで私自身のことを少しお話しすることをお許しください。これまで名をあげた研究者と比べて、私はやや素性を異にしております。と申しますのも、私はマルクス－レーニン主義的な時流に対して最初から少々距離を置いていた人間だからです。ドイツの歴史がほとんどストレートにプロイセンの歴史と同一視されていたことからして、私にはいささか違和感のあることでありました。ドイツの歴史は、いろいろな地域史から成り立っていて、もっとずっと多様なものであったはずだ――私にはそう思われたのです。しかしさまざまな地域史を並べ、あるいは積み重ねたところで、それで統一的なドイツ史が出来上がるわけではありません。どのようにして多様なドイツ史を統一的に把握し、叙述すべきか、あるいは、どうしたらそれができるのか――勉強を始めた時から今日まで、それが私にとっての問題でありました。そしてこういう問題設定からして、私はかつて自ら地域史の研究に携わることもいたしました。そこから生まれたのがクールヘッセンの農民解放に関する私のマールブルクでの論文でありまして、これまた農業史の論文ではありますが、日本の他の農業史の論文とは系譜が全く異なるものであります。[25] そして私はこの論文ではまだ直接メーザーの世界に触れてはおりませんけれど、それでも当時もうすでに、なんとなくメーザーの近くにいたような気がしております。

私がメーザーを識ったのは、マールブルクで読んだ一冊の本によってであります。ヴィルヘルム・モムゼンの『ゲーテの政治観』――著者は私のマールブルクでの先生の一人です。私はこの本に大変感銘を受けまして、日本に帰国後、一度これを翻訳することを試みたのであります。しかしできませんでした。なぜなら、ゲーテについての私の知識、彼の時代についての私の知識がまるで不十分だったからです。そこで私は十八世紀の勉強を始めまして、そこから後年、翻訳に代わって、『ゲーテとその時代』という私の本が生まれた次第であります。一般読者を対象としたこ

の本の中で、私はもちろんメーザーとゲーテの関係についていろいろと述べるところがありました。[26]

しかし、私がメーザーに関心をもつのは、その人物によるだけではありません。彼の時代、とりわけ当時のやや特殊な時間意識が興味深いのです。

かつてルードルフ・シュターデルマンが、歴史的な時間に対する私たちの関係は一七五〇年頃から根底的に変わったのだと指摘したことがあります。十八世紀の中頃までは、まだ古いもの、古来のものがより良いもの、より妥当性をもつものとされておりました。それに対して新しいものを求める者は冒瀆者と見なされまして、彼が世の信用を得ようとしたら、彼は一般に古来のものとされているものよりももっと古いもの、ものごとの根源に結びつくという形で議論をする他はなかったのです。ところがこの関係が一七五〇年頃に逆転します。古いものの擁護者であるという評判は、いまやあまり芳しからぬ響きをもつことになります。誰かが昔から行われていることを弁護したりすると、そういう人はもう古臭い人だということになってしまうのです。[27]

十八世紀における、特にその中頃から目立つようになる人間の時間意識のこのような変遷については、他の歴史家からもさまざまに指摘がなされております。例えばオットー・ブルンナー、[28]またカール・ボーズルもそれを指摘しております。[29]そして最後にビーレフェルトの歴史家ラインハルト・コゼレックが、大規模な辞典『歴史的基本概念』の共編者として、この注目すべき過度期に「はざま期（Sattelzeit）」の名を与えました。意味論的に見てその時期に、例えば「民主制」とか「革命」といった多くの歴史的基本概念がその古来の意味内容を失い、他方で新しい意味をもつようになってゆく、そういう時期であります。その今までになかった新しい意味が、その後に生まれたものにとっては自明のものとなるのです――つまり、古い生活世界が徐々に失われ、近代的な世界が姿を現してくる時代、古い世界と新しい世界が重なり合っていた時代であります。[30]

さて、これこそユストゥス・メーザーが生きていたその時代であること、もはや明らかでありましょう。まさに過去に立ち返ることによって新しい歴史的視点を提示した、そのメーザーが生きていた時代です。メーザーを理解しようとするなら、十八世紀の時間意識を正しく捉えなければならない――パウル・ゲッチングも正しくそう指摘しております。[31] 翻ってメーザーこそ、その人を通じて私たちが十八世紀というこの大きな過度期を具象的に捉えることができる人物の一人、時代理解の鍵を握っている人物の一人であるように私には思われます。彼が「はざま期」をどう生きたのか！　メーザーを通じてその時代をも理解すること――それが私の主たる関心事でありますが、その関心にはもちろん、ある希望が随伴しております。すなわち、日本とドイツのメーザー研究の間に小さな橋を架けたいという希望であります。

ご清聴有難うございました。

註

(1) Kinya Abe, Justus Möser in der japanischen Geschichtswissenschaft, in: Osnabrücker Mitteilungen, Bd. 79 (1972), S. 103-108.

(2) Wilhelm Roscher, Geschichte der National-Oekonomik in Deutschland, München/Berlin 1924, S. 501. メーザーについてはS. 500-527.

(3) アルフォンス・ドプシュ（野崎直治他訳）『ヨーロッパ文化発展の経済的社会的基礎』創文社、一九八〇年。メーザーについては二一―二六ページ（ドープシュはここでメーザーの故郷を「ミュンスター司教領」としている。この学者にしてこの思い違いと、微笑を禁じ得ない）。なおドープシュの学説の紹介や研究は日本では一九一四年以来さかんに行われた。これについてはAbe, a. a. O., S. 107f. を参照されたい。

(4) 戒能道孝『入会の研究』日本評論社、一九四三年（増補改定版、一粒社、一九五八年）。

(5) メーザーに関する記述は同上書、六―一四ページ。著者戒能氏の理論的関心は、いわゆる入会地（マルク）総有学説――それはギールケに代表され、当時日本においても支配的学説になっていた――を論破することにある。この学説ではマルクに対するマルク共同体全体の権利が前面に出、マルクは公有財産としての性格を帯びるのであり、そういうものとして、さらには国家の手に帰し得るものとなってしまう。この関連において戒能氏は、マルク共同体論の元祖であるメーザーが、実は決して総有説の主唱者ではなく、むしろ個々の土地所有者の個別所有権を論の基礎としていることを強調している。なお著者のメーザーについての知見は、ドープシュとマイネッケ以外では、主に『愛国の幻想』の新版（一八七一）に付されたReinhard Zöllner, "Justus Möser"、ならびにKarl Brandiが自分の編纂したメーザー著作集（Gesellschaft und Staat, München 1921）に付した序説によっていることを付言しておく。

(6) L. ブレンターノ（我妻栄・四宮和夫訳）『プロシャの農民土地相続制度』農林省農業総合研究所（翻訳叢書第11号）、一九五六年。

(7) 南亮三郎『人口学総論』千倉書房、一九六〇年（一九四三年の著書『人口原理の研究』の改訂新版）。メーザーについては特に九八―一〇一、一八〇―一八一ページ。

(8) 例えば南は、メーザーが『愛国の幻想』第一巻の四十番目の論説（"Schreiben eines westfälischen Schulmeisters über die Bevölkerung seines Vaterlandes"）に引用したスペイン人ドン・ジェロニモ・ド・ウスタリッツの話は、その十数年前に書かれたダヴィッド・ヒュームの一論文（Hume, populousness of ancient nations, 1752）に引かれていたことを指摘している（『人口学総論』、一八一ページ）。これはメーザーの全集に付された最新の注解にも見出せない指摘である。なお南が参照したルプレヒトの本はLudwig Rupprecht, Justus Mösers soziale und volkswirtschaftliche Anschauungen in ihrem Verhältnis zur Theorie und Praxis seines Zeitalters, Stuttgart 1892 (insbes. S. 91–99).

(9) 出口勇蔵「ユスツス・メーゼル（上・下）」『経済論叢』第六一巻／第四号（一九四七年）、第六二巻／第一・二号（一九四八年）。小林榮三郎「ユストゥス・メーザーの政治的関心について」『史淵』第六五号（一九五五年）。

(10) W. I. Lenin, Werke, Berlin 1963, S. 236.『レーニン全集』大月書店、第十三巻、二三五ページ。

(11) 小林氏のリスト研究は、全九巻からなる『小林昇経済学史著作集』（未来社、一九七六―一九七九年）の第六―八巻を占

めている。メーザーは多くの箇所で言及されているが、特に集中的には彼の最初のリスト研究である「リストの生産力論」(第六巻、九一—二七四ページ)の最後の二章(第九／一〇章、二三九—二七三ページ)においてである。なお以下の二論文はドイツ語で読むことができる。Die List-Forschung in Ostdeutschland (The Science Council of Japan, Division of Economics, Commerce & Business, Economic Series, No. 29, Feb. 1962); Friedrich Lists System der Sozialwissenschaft–von einem japanischen Forscher betrachtet, in: Studien zur Entwicklung der ökonomischen Theoie X, hrsg. von H. Scherf, Berlin 1990 (=Schriften des Vereins für Sozialpolitik, Bd. 115/X).

(12) 例えば彼は、マイネッケが歴史哲学的に称揚した「地方理性 (Lokalvernunft)」というのは、メーザーにおいては実際のところ「地方の必要 (Lokalbedürfnis)」ないし「地方的事情 (Lokalumstand)」とそう違わないものだったということを、原典の当該箇所を示しつつ、さらりと指摘している。『経済学史著作集』第六巻、二六一ページ、註九。

(13) ただし、重要性を認めるといっても、きわめて批判的な視点からである。なぜなら、リストがここで要請しているところの、零細経営を排除しての健全な中農層の創出は、必然的に一種の強制的世襲農場法の要請へとつながったであろうし、その上リストは、それによって生ずるはずの農村の過剰人口問題を、東南ヨーロッパへの移民によって解決されるとしたからである。

(14) 小林氏以外では、林健太郎氏がそのプロイセン改革研究において、フライヘル・フォム・シュタインに対するメーザーの影響を注目すべき重要な事実と指摘している(『近代ドイツの政治と経済』弘文堂、一九五二年、二九ページ。現在では『林健太郎著作集』第二巻、山川出版社、一九九三年、三一ページ)。また同一の指摘が石川澄雄氏のシュタイン評伝によってもなされている(『シュタインと市民社会』御茶の水書房、一九七二年、特に一二五—一二七ページ)。しかし特別に深められたわけではない。

(15) 林健太郎／澤田昭夫『原典による歴史学の歩み』講談社、一九七四年(題名だけ変えた新版『原典による歴史学入門』講談社、一九八二年)。「オスナブリュック史」は同書四一六—四三〇ページ。

(16) 小島康夫「ユストゥス・メーザーの道化擁護論」『ゲーテ年鑑』第三九巻、南江堂、一九九七年、二一五—二三五ページ。

(17) 柳原初樹「Osnabrück における Möser と Weimar における Goethe」『獨逸文学研究』(関西学院大学)第二九輯、一九八七年、三九—六八ページ。

(18) Lenin, Werke, Bd. 3, S. 59.『レーニン全集』第三巻、
(19) 藤田幸一郎『近代ドイツ農村社会経済史』未来社、一九八四年。
(20)『手工業者の名誉と遍歴職人』未来社、一九九四年。
(21) 平井進「北西ドイツの下層人口問題と村落社会秩序」『社会経済史学』第六六巻、第一号、四三―六六ページ。
(22) 肥前栄一『ドイツとロシア』未来社、一九八六年。
(23) August Freiherr von Haxthausen, Böckendorf und Böckerhoff, hrsg. von Eiichi Hizen, in: Westfälische Zeitschrift, Bd. 137 (1987), S. 273-330.
(24) メーザー研究会の会員諸氏と、豊橋市在住のメーザー・ファンである伊藤正英氏に、この場を借りて、私の知らなかった文献についての諸氏の示唆に感謝したい。
(25) Eihachiro Sakai, Der kurhessische Bauer im 19. Jahrhundert und die Grundlastenablösung, Melsungen 1967 (=Hessische Forschungen zur geschichtlichen Landes- und Volkskunde, Hft. 7).
(26) 坂井榮八郎『ゲーテとその時代』朝日選書、一九九六年。その中に「保守的啓蒙家メーザーとゲーテ――小さな領邦の文化的役割」という一章（一〇二―一一二ページ）がある。
(27) Rudolf Stadelmann, Deutschland und die westeuropäischen Revolutionen, in: Probleme der Reichsgründungszeit 1848-1879, hrsg. von Helmut Böhme, Köln/Berlin 1972, S. 37.
(28) Otto Brunner, Neue Wege der Verfassungs- und Sozialgeschichte, 2. Aufl., Göttingen 1968. 邦訳、オットー・ブルンナー著、石井紫郎他訳『ヨーロッパ―その歴史と精神』岩波書店、一九七四年。大きな過度期としての十八世紀については多くの箇所で、しかし特に「〈全き家〉と旧ヨーロッパの〈家政学〉」（邦訳、一五一―一八九ページ）で論じられている。
(29) Karl Bosl, Die Grundlagen der modernen Gesellschaft im Mittelalter, Teil I, München 1972, S. 61.
(30) Geschichtliche Grundbegriffe, hrsg. von O. Brunner/W. Conze/R. Koselleck, Bd. 1, Stuttgart 1972, Einleitung, S. XV. 移り変わる時間意識については、Reinhart Koselleck, "Neuzeit". Zur Semantik moderner Bewegungsbegriffe, in: ders. (Hrsg.), Studien zum Beginn der modernen Welt, Stuttgart 1977, S. 264-299 をも参照されたい。なお「はやま期」の訳語について一言。原語の"Sattelzeit"は直訳すれば「鞍の時代」、「鞍部期」である。乗馬の「鞍」であり、山の稜

線のくぼみの「鞍部」である。鞍は前から見れば山型、凸型であり、二つの時代が左右に截然とわかれる。これを意訳すれば「分水嶺期」となろう。他方、鞍を横から見れば、鞍部と同じで、中央がくぼむ凹型である。山の鞍部の傾斜は鞍よりも緩やかである。一方で古い時代がゆるやかに下降し、新しい時代が徐々に上昇する。私は最初、前の意味をとって「分水嶺期」と訳してみたこともあるが（坂昌樹氏がこれを「峠の時代」と訳されたのもそういう意味であろうと思われる。「ドイツ啓蒙の実用主義について」『国際文化論集』第二一号、二〇〇〇年三月、二〇二ページ、および二四二―三ページの注記）、本文にも記したように、この時期の特徴は、まさに二つの時代が重なり合いながらゆっくり交代してゆくところにあり、「分水嶺」ではそのニュアンスが失われる。そこで「鞍部」の方の意味をとり、ただし「鞍部期」では日本語としてさまにならないので、山の間といった意味も生かして「はざま期」とした次第である。ただこれで本当にいいかどうか多少気になっていたので、オスナブリュック滞在中、旧知のコゼレック氏に電話して原語の含意を確かめたところ、もはやその発想時のことは忘れてしまったが、いずれにしても、二つの時代に分かれる意味と、二つが重なる意味と両方あると考えてもらってよい、ということであった。「はざま期」という訳語にこだわるつもりもないが、これがそう見当外れな訳語でなかったことは確かめられたと言えるであろう。なおこの「はざま期」が何時から何時までと確定できる性質のものでないことは、"Geschichtliche Grundbegriffe" 自体が示すところとなったのだった。これについては、Christof Dipper, Die "Geschichtlichen Grundbegriffe". Von der Begriffsgeschichte zur Theorie der historischen Zeiten, in: Historische Zeitschrift, Bd. 270 (2000), S. 281-308 を参照されたい。

(31) Paul Göttsching, Geschichte und Gegenwart bei Justus Möser, in: Osnabrücker Mitteilungen, Bd. 83 (1977), S. 101f. ただしゲッチングはメーザーの生活世界の「古い」側面の方を、本文であげた論者たちよりもやや強調して論じている。